

2021年1月30日

2020年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
修士論文

がん薬物療法を受ける進行がん患者のケアに携わる看護師の
がん悪液質に関するアセスメントの影響要因

Factors Affecting Assessment of Cancer Cachexia
by Nurses Caring for Advanced Cancer Patients
Undergoing Chemotherapy: A Cross-Sectional Survey

19MN014

佐藤 理佳

【目的】

がん薬物療法を受ける進行がん患者のケアに携わる看護師のがん悪液質の認識と知識、及びがん悪液質のアセスメントについて現状を明らかにすること、がん悪液質のアセスメントの影響要因を明らかにすることを目的とした。

【方法】

全国のがん診療連携拠点病院と地域がん診療病院に勤務する看護師を対象に、webを用いて無記名自己記入式質問紙調査を実施した。概念枠組みにバンデューラの相互決定主義を適用した。質問紙はがん悪液質の認識、がん悪液質の知識、がん悪液質のアセスメントについて問う項目で構成した。分析は各変数とアセスメント項目数との関連について、Spearman の順位相関係数、Mann-Whitney の U 検定、Kruskal-Wallis 検定、パス解析を行った。データの分析には統計パッケージ IBM SPSS statistics 24.0、Amos Graphics 22.0 を使用した。本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号 20-A021）。

【結果】

質問紙の回収率は 39.3% (403 名)、有効回答率は 76.7% (309 名) であった。対象者の年代は 30-40 代が 6 割を占め、がん薬物療法を受ける患者のケアに携わっている経験年数は、10 年以下が過半数を占めていた (63.4%)。がん悪液質のアセスメント項目数に関連する要因は、「がん悪液質のアセスメントを行なった症例数」、「がん悪液質に関する教育や研修参加の経験」、「がん悪液質のアセスメントのための十分な時間がないこと」、「がん悪液質の認識」、「がん悪液質の知識」、「管理栄養士や理学・作業療法士と定期的に情報共有をしていること」であった。

パス解析の結果、「がん悪液質のアセスメント項目数を規定する相互関連モデル」を得、適合度指標は、GFI = .996、AGFI = .978、CFI = .998、RMSEA = .017 であった。『アセスメントは看護師の役割だと思う』を基盤に、『アセスメントは必要だと思う』、『アセスメントに自信がある』、『知識得点』を経由し、『アセスメント項目数』へ直接的、間接的に規定されていることが明らかになった。パス係数はいずれも有意な値を示し、モデルの全体の決定係数は $R^2 = .13$ であった。多母集団同時分析の結果、病院外の研修に参加した群はそうでない群と比較し、『アセスメントをすることは必要だと思う』から『アセスメントに自信がある』へのパス係数に ($C.R. = -2.030$)、理学・作業療法士と定期的に情報共有をしている群はそうでない群と比較し、『アセスメントは看護師の役割だと思う』から『アセスメントをすることは必要だと思う』へのパス係数に ($C.R. = -3.613$) 統計学上有意な差が見られた。

【結論】

がん悪液質のアセスメントにはがん悪液質の認識、知識が関連し、がん悪液質の認識には病院外の研修参加の経験や他職種との連携が関連していた。がん薬物療法を受ける進行がん患者のケアに携わる看護師は、継続教育として病院外の研修の場を活用し、他職種と協働していく中で、がん悪液質の認識を高めていく必要性が示された。またこれらの課題を克服できるような教育の機会の場の必要性も示唆された。